

博物館のサウンドスケープ・デザインにおける 「音声ガイド」の考察

加藤 修子

【要旨】 博物館における音声ガイドは、現在多くの展示に採用されている。博物館における「音の展示」と「音による環境づくり」の二つの領域に、音の積極的活用の度合いから、連続する6つのレベルを設定した。音声ガイドは、この6つのレベルのうち、「レベル3.2 音声解説」に分類できる。今回の訪問調査を通して、音声ガイドは「レベル3.2：音声解説」に加えて「レベル4：展示のための音による環境づくり」の役割を果たすことがわかった。また音声ガイドはナレーターを選出も重要であることがわかった。さらに、音声ガイドは博物館のサウンドスケープ・デザインにおいて、多くの可能性をもつと考えられる。

本稿では、音声ガイドの位置づけを確認し、実際に採用された音声ガイドの実例に基づいて、音声ガイドのさらなる可能性を追究する。

【キーワード】 博物館、音の展示、音による環境づくり、サウンドスケープ・デザイン、音声ガイド

目次

- 1 はじめに
- 2 博物館における6つの音活用レベルの設定
- 3 音声ガイドの位置づけ
 - 3.1 音声ガイド
 - 3.2 音声ガイドの位置づけ
- 4 音声ガイドの実例
 - 4.1 よみがえる黄金文明展（大丸ミュージアム）の音声ガイド
 - 4.2 特別展：スリランカ（東京国立博物館）の音声ガイド
 - 4.3 ボストン美術館：浮世絵名品展（江戸東京博物館）の音声ガイド
 - 4.4 フェルメール展（東京都美術館）の音声ガイド
 - 4.5 その他の博物館の音声ガイド
- 5 音声ガイドの評価
- 6 音声ガイドの展開と可能性
- 7 おわりに

1 はじめに

博物館の展示鑑賞を助ける音声ガイドが近年変わりつつある。洗練されたデザインの最新機種を使ったり、ナレーターに有名人を起用したりする例が見受けられる。展示品と黙って向き合うだけでは満足のできない人々のニーズに、積極的に応える博物館（美術館を含む）が登場している。

博物館における音声ガイドは、現在多くの展示に採用されている。博物館の音環境は、「音そのものの展示」と「展示のための音による環境づくり」の二つの領域で考えることができる¹⁾。この二つの領域は博物館における音活用の方向及び方法を示すものである。

博物館における「音の展示」と「音による環境づくり」の二つの領域に、音の積極的活用の度合いから、連続する6つのレベルを設定した²⁾。音声ガイドは、この6つのレベルのうち、「レベル3：展示物と音を組み合わせた展示」の中の「3.2：音声解説」に分類できる。今回の訪問調査を通して、音声

ガイドは「レベル3.2：音声解説」に加えて「レベル4：展示のための音による環境づくり」の役割を果たすことがわかった。さらに、音声ガイドは博物館のサウンドスケープ・デザインにおいて、多くの可能性をもつと考えられる。

最近、音声ガイドの機器やシステムが積極的に開発され、今までにない効果をもたらすことができるようになってきた。

本稿では、博物館のサウンドスケープ・デザインにおける音声ガイドの位置づけを確認する。そして、実際の展示に採用された音声ガイドの実例に基づいて、博物館のサウンドスケープ・デザインにおける音声ガイドのさらなる可能性を追究する。

2 博物館における6つの音活用レベルの設定

博物館における「音の展示」と「音による環境づくり」の二つの領域を、音の積極的活用の度合いから、以下のような連続する6つのレベルに分類することができる³⁾。

「音の展示」

- ↑ レベル1：音をテーマとした展示
- ↑ レベル2：サウンド・インスタレーション
- ↑ レベル3：展示物と音を組み合わせた展示
 - 3.1：音を出す装置
 - 3.2：音声解説
 - 3.3：映像展示
- ↓ レベル4：展示のための音による環境作り
- ↓ レベル5：展示内容と関連性の低い音の提供
 - 5.1：BGM
 - 5.2：アナウンス等信号音
- ↓ レベル6：騒音対策

「音による環境づくり」

レベル1からレベル6のうち、レベル1が最も「音の展示」の要素が高い。続いてレベル2のサウンド・インスタレーションも、「音の展示」の要素が高い。

レベル4からレベル6にいくにしたがって「音による環境づくり」の要素が少しずつ大きくなる。

6つのレベルのうち、音声ガイドは、「レベル3：展示物と音を組み合わせた展示」の中の「3.2：音声解説」に位置づけることができる。レベル3は、展示に伴う音も展示の一部で、音がなければ展示は完成しない。しかし、音声ガイドは全ての鑑賞者が利用するわけではない。したがって、音声ガイドがなくても、展示そのものは一応完成していると言える。

3 音声ガイドの位置づけ

レベル3.2の音声解説は、時としてその展示を目の前に見ていない人にも聞こえてしまう。そこで、ある特定の展示を見ている特定の人のみ音声解説を聞くことを可能にするのが、音声ガイドである。

3.1 音声ガイド

音声ガイドは、現在多くの博物館、美術館等で使用されている。音声ガイドとは、ハンディタイプの音声再生機を使って博物館や美術館などで音声による作品解説を行うシステムである。

音声ガイドの利点として、次の点を挙げることができる。

- ① 見ることと聞くことの相乗効果⁴⁾で、利用者により深い理解と感銘を提供することができる。
- ② 文字によるキャプションでは十分に伝えきれない情報を、利用者に提供できる。
- ③ 全ての利用者に、同じ品質・内容の解説や説明を提供できる。
- ④ 作品の解説は、繰り返し聞くことができる。

音声ガイドを利用できる場所としては、博物館、美術館のみならず、動物園、水族館、博覧会、工場見学、参拝コース、観光汽船、記念公園、及びその他多数ある。

3.2 音声ガイドの位置づけ

音声ガイドは第2章で述べた6つの音活用レベルのうち、「レベル3：展示物と音を組み合わせた展示」の中の「3.2：音声解説」に位置づけることができる。レベル3の概要を述べる。

レベル3：展示物と音を組み合わせた展示

レベル3.1：音の出る装置：展示に何らかの音が鳴る仕掛けが加えられた作品または装置

レベル3.2：音声解説：一般の展示やジオラマに音による解説等を組み合わせたもの

レベル3.3：映像展示：スクリーン映像、ハイビジョン映像、ビデオに音声に伴うもの

展示に伴う音も展示の一部で、音がなければ展示は完成しない。

レベル3.2の音声解説は、時としてその展示を目の前に見ていない人にも聞こえてしまう。そこで、ある特定の展示を見ている特定の人にもみ音声解説を聞くことを可能にするのが、音声ガイドである。

また、第2章でも述べたとおり、音声ガイドはすべての鑑賞者が利用するわけではない。したがって、音声ガイドがなくても、展示そのものは一応完成していると言える。それでは、音声ガイドの役割とはどのようなものであろうか。そこで第4章で音声ガイドの実例を述べ、その役割と可能性を追求する。

4 音声ガイドの実例

この章では、最近開催された博物館、美術館の展示のうち、すぐれた音声ガイドを使用していた例を紹介する。

4.1 よみがえる黄金文明展（大丸ミュージアム）の音声ガイド

4.1.1 よみがえる黄金文明展の概要

「よみがえる黄金文明展：ブルガリアに眠る古代トラキアの秘宝」は、2008年9月3日の北海道立近代美術館での展示をかわきりに、全国7か所の博物館、美術館で2009年7月5日まで日本で開催された。この展覧会は、「日本・ブルガリア国交再開50周年」を記念して開催されることとなった。著者は2009年1月29日～2月15日まで開催された「大丸ミュージアム・東京」展を鑑賞した。東京展初日の1月29日は訪日していたブルガリアのバルヴァノフ大統領夫妻、秋篠宮殿下妃殿下、センドフ駐日大使等が列席し、盛大なオープニング・イベントが行われた。著者が訪問したのは、2009年1月31日である。

本展覧会ではブルガリアで発見され、メソポタミアよりも遙か昔、紀元前4000年代に作られたとされる「世界最古の金製品」をはじめ、その約1000年後に栄えた黄金文明「トラキア」を紹介するものである。トラキア人とは、現在のブルガリアを中心とした地域で活躍した人々で、その実像は長い間謎に包まれていた。それは、トラキアがギリシャやローマと交流し、高度な文明を築きながらも、自らの文字を持たなかったからである⁵⁾。歴史資料が極めて少なく、未だその実像は多くの謎に包まれている。しかし、近年ブルガリアで墳墓の発掘が次々に進み、彼らの文明は古代史に登場した新たな文明として、いま全世界で注目を集めている。その発掘には日本の発掘調査団が大きな協力をしている⁶⁾。

勇敢な騎馬戦士としてトロイ伝説にも登場するトラキア人は、紀元前3千年頃よりヨーロッパ南東部バルカン半島に広大な勢力を築く。紀元前5世紀から前3世紀に最盛期を迎え、ギリシャ、ペルシアなどさまざまな文明の影響を受けながら、独自の文化を築き上げる。黄金を使った華麗に輝く作品の数々は、当時の栄華を物語るとともに、その高度な芸術性を示している。本展は、21世紀の大発見として日本初公開となる「トラキア王の黄金のマスク」を

はじめ、トラキア戦士たちの鎧や兜、そしてブルガリアから見つかった世界最古と言われる黄金製品を含むブルガリア国立博物館群の秘宝170余点を一挙公開している。「トラキア王の黄金のマスク」は2004年の発掘時に、「21世紀の大発見」として世界中に注目された。まさしく近年のブルガリアの最新の考古学的発見が展示されている。これらの展示品はブルガリアの21の博物館から集められた。

4.1.2 よみがえる黄金文明展(大丸ミュージアム)の音声ガイド

音声ガイドの監修は藤盛美郎(ふじ もりみろ)氏(東海大学文学部ヨーロッパ文明学科教授)と禿仁志(かむろ ひとし)氏(東海大学文学部歴史学科考古学専攻教授)である。2人は「トラキア発掘調査団」として1983年からブルガリアを訪問し、実際に発掘調査に加わった⁷⁾。藤氏と禿氏はこの展覧会全体の監修者でもある。

音声ガイドは170余点の作品の中から、主要な作品26点の解説を聴くことができる。操作のしやすさ、ナレーターの声、解説の内容どれも高く評価できる。音声ガイドの所要時間は30分である。会場入口にて借りることができ、事前の予約は必要ない。使用料は500円である。

この展覧会の音声ガイドのシステムは「株式会社

オーディオガイド」によるものである。展示品の見どころや、より深い鑑賞のために知っておきたい事柄・時代背景などを、分かりやすくまとめている。壁の解説パネルを読む必要がなく、解説を聴きながら同時に作品をじっくり鑑賞することができる。「A&D オーディオガイド」では一般的な特別展では、見どころの主な作品20数点に、30分程度で解説を聴けるよう設計されている。

その利点は、聴きたいところを聴きたいときに何度でも聴けるという点である。例えば、展示室のソファに座って気になった作品のガイドをもう一度聴いたり、歩きながら、好きなペースで聴くことができる。使い方は、簡単に「作品番号」と「再生ボタン」を押すだけである。タッチパネル方式、テンキー方式である。いろいろな年齢層の不特定多数の来館者が訪れる展覧会では、この操作のし易さは大変重要である。

ガイドナレーターは安井邦彦氏である。安井邦彦氏(1960年12月12日-)は、「81プロデュース」に所属する男性声優、舞台俳優である。張りのある低音で、壮年男性や迫力のある青年などを演じることが多い。今回の「よみがえる黄金文明展」では、たいへん落ち着いた張りのある声で、この展覧会のガイドナレーターとして、まさに適切な人物であったと思う。音声ガイドにおいては、ガイドナレーターの存在も重要である。この展示の音声ガイドのナレーターは、特別なことをしているわけではない。淡々と丁寧に作品の解説を行っている。それが、とても好印象をもった。展示されている作品自体が、黄金のきらびやかな展示品ばかりである。それを、尊重し前面に出しながらの、控えめで落ち着いた声である。今回は、鑑賞者の視覚からの感動を、さらに聴覚により補うのに、邪魔にならないナレーターであったと思う。

何より大事なのは、音声ガイドの解説の質の高さである。音声ガイドの監修は、藤盛美郎氏と禿仁志氏である。先にも述べたように、日本におけるこの展覧会の総合監修を行っている。音声ガイドで扱う26点の作品リストを表1に示す。



写真1 よみがえる黄金文明展の音声ガイド

表1：「よみがえる黄金文明展」音声ガイド作品リスト

ガイド番号		作品名	時代
1	♪1	プロローグ	—
2		王笏	前5千年紀後半
		腕輪	前5千年紀後半
3	♪2	角状突起付壺	前12—前11世紀
4		石碑	前3世紀初頭
5		注口付アンフォラ	前5世紀初頭
6	♪3	外科手術道具一式	2—3世紀
7		兜	前4世紀前半
8		飾り金具	前4世紀前半
9		鎧	前5世紀後半
10		デュオニソス奉納碑	2世紀末
11		胸飾り	前5世紀後半
12		指輪	前5世紀後半
13		フィアラ杯	前5世紀後半
14		ネックレス	前5世紀
15		カンタロス杯	前5世紀第3四半期
16		黒会式アンフォラ	前480—470年
17		黄金の花冠	前4世紀中頃
18	♪1	トラキア王の黄金のマスク	前5世紀後半
19	♪4	すね当て	前4世紀後半
20		ペガサス形金製品	前4世紀中頃
21		スフィンクス形リュトン	前4世紀前半
22		フィアラ杯	前4世紀(第3四半世紀)
23		アンフォラ形リュトン	前4世紀末—前3世紀初頭
24		鹿形リュトン	前4世紀末—前3世紀初頭
25		フィアラ杯	前4世紀末—前3世紀初頭
26	♪1	女性頭部形リュトン	前4世紀末—前3世紀初頭
55	♪2	♪音楽をじっくり聴きたい方に…♪ 「Bavna melodia」(約1分)	
88	♪1	番外編 ギリシア神話より～ トラキア王の息子 オルフェウスの物語	

「よみがえる黄金文明展」は大きく3つの部門に分かれている。「第1章：文明の十字路」「第2章：墳墓に眠る謎」及び「第3章：黄金の秘宝」である。音声ガイド番号1の「プロローグ」でこれからこの展示を鑑賞するときめきとダイナミックな冒険気分をかきたてられる。「第1章：文明の十字路」の展示品は、音声ガイド番号2の「王笏、腕輪」から音

声ガイド番号10の「デュオニソス奉納碑」である。「第2章：墳墓に眠る謎」の展示品は、音声ガイド番号11の「胸飾り」から音声番号19の「すね当て」である。「第3章：黄金の秘宝」の展示品は、音声ガイド番号20の「ペガサス形金製品」から音声番号26の「女性頭部形リュトン」である。第1章から第3章まで、それぞれ9点、9点、7点の展示品を選出している。どの展示品もそれぞれの章を代表する、みごとな作品ばかりである。音声ガイドではそれぞれの展示品の時代背景とともに、どのようにこの作品を鑑賞すればいいか、作品のどこに注目すればいいかを丁寧に説明している。文字によるキャプションでは十分に伝えきれない情報を、鑑賞者にわかりやすく紹介している。

圧巻は音声ガイド番号17の「黄金の花冠」と18の「トラキア王の黄金のマスク」である。「黄金の花冠」(写真2参照)は、ゴリヤマタ墳丘墓から発見されたもので、捩った金板を組み合わせて作ったオリーブの枝と、その枝に溶接された70枚のオリーブの葉、その実32点で構成されている。花冠の前面には勝利の女神、有翼のニケがあらわされている。この花冠は、トラキアでこれまでに見つかった



写真2 黄金の花冠

出典：<http://www.yomigaeru-gold.jp/highlight/chapter2.html>

中でも最も華奢な作品の一つである。その見所を音声ガイドでは、丁寧に説明してくれる。

「トラキア王の黄金のマスク」(写真3参照)は21世紀の大発見といわれたものであり、シプカのスヴェティツァ墳丘墓から発見されたものである。このマスクは、トラキアで初めて発見された黄金のマスクであるが、墓を覆っていた蓋石の崩落により著しく変形している。このマスクは、ひげをはやした男性の個性的な顔が浮き彫りで表現されている。マスクは厚い金板を打ち延ばして厚さ最大3mmのフィアラ杯としたもので、重量も672gを量る。発掘したキトフ教授によると、マスクのモデルはオドリュサイ王国を築いたテレス1世である可能性があり、「これはフィアラ杯に顔を近づけて、ワインを飲み干そうとする王の顔である。実際に王がフィアラ杯からワインを飲み干そうとする顔が、他の人からは王が普通の人間から黄金の人間に変身するように映り、王の持つ能力と超自然的な神性を信じるのである」と述べている⁸⁾。このマスクが王権の象徴として重要な役割を果たした可能性は高い。音声ガイドではこの「トラキア王の黄金のマスク」を前後左右からゆっくり鑑賞している間に、以上のような解説を丁寧に述べる。鑑賞者は、その説明と目の前

の作品に感心しながら深い理解を得ることできる。

また、「黄金の花冠」と「トラキア王の黄金のマスク」は、隔離された部屋に展示してあり、そこではブルガリアのバラの産地であるカザンラクで採集されたバラの香りをいっしょに堪能することができる。

音声ガイドでは、解説のBGMとして「ガドゥルカ」という民族楽器を使ったブルガリア民謡・舞曲を楽しむことができる。「ガドゥルカ」とは、中央ブルガリアのトラキア地方などでよく演奏される弦楽器である(写真4参照)。一般的に3弦で、そのほか実際には弾かない共鳴弦が10本ある。その独特の哀愁を帯びた響きを聴くことができる。表1の音声ガイド作品リストのうち、音符のマーク♪が付



写真3 トラキア王の黄金のマスク

出典：<http://www.yomigaeru-gold.jp/highlight/chapter2.html>



写真4 ガドゥルカ (Gdulka)

いた音声ガイド番号1、3、6、18、19、26で「ガドゥルカ」の音色を聴くことができる。そのBGMは4種類あり、♪1は「カリマンク デンク：名づけ子 デンカよ」、♪2は「バヴナ メロディア：ゆっくりのメロディ」、♪3は「コパニツア：11/8拍子の曲」そして♪4は「チェルペリイスカ ラチェニツア：チェルペリイの7/8拍子の曲」というブルガリア民謡・舞曲を聴くことができる。また、音声ガイド番号55では、「ガドゥルカ」の音楽をじっくり聴きたい人のために、約1分間♪2の「バヴナ メロディア：ゆっくりのメロディ」を聞くことができる（表1参照）。

音声ガイドのBGMの「ガドゥルカ」を演奏するのはヨルダン・マルコフである。1977年、トラキア地方ノヴァ・ザゴラ生まれで、国立シューメン大学音楽科を卒業する。7歳より「ガドゥルカ」を弾き始める。2006年の来日以来、ブルガリア音楽の演奏活動を多数行なっている。

ここで、音声ガイドのBGMである「ガドゥルカ」の演奏は、第2章の6つの音活用レベルの「レベル4：展示のための音による環境づくり」に相当することが確認できる。これまで音声ガイドは6つの音活用レベルにおいて「レベル3.2：音声解説」の位置づけをしていた。この展覧会で音声ガイドは、「レベル3.2：音声解説」の役割のみでなく、その他の役割も同時に行なうことができることが確認された。この展覧会の「ガドゥルカ」の演奏は、単なるBGMではない。まさに展示を鑑賞するための重要な環境づくりを担っているのである。

また、音声ガイド番号88では番外編としてギリシャ神話より、トラキア王の息子オルフェウスの物語を聴くことができる。物語を聴きながら、♪1の「カリマンク デンク：名づけ子 デンカよ」をいっしょに聴くことができる。

「よみがえる黄金文明展」は、まさに視覚・聴覚・臭覚で堪能できる展覧会である。

4.2 特別展：スリランカ（東京国立博物館）の音声ガイド

4.2.1 特別展：スリランカの概要

東京国立博物館表慶館における特別展「スリランカ：輝く島的美に出会う」は、2008年9月17日～11月30日まで開催された。「光輝く島」という意味を持つスリランカの日本ではじめての本格的な展覧会である。紅茶や宝石などで世界的に有名なスリランカには、2000年以上の長い歴史があり、人々が育んできた素晴らしい文化が存在する。本展覧会では、仏像やヒンドゥー神像、仏具などの宗教芸術作品や、美しい宝石をふんだんにちりばめた宝飾品など、国宝級の作品を含む146点の展示を行っている。スリランカ美術の粋を一堂に集めた展覧会である。このようにスリランカの芸術作品をまとめて紹介する本格的な展覧会は日本では初めてである。本展はスリランカの文化遺産の魅力を知る貴重な機会である（写真5参照）。



写真5 東京国立博物館：特別展スリランカ

出典：<http://www.asahi-mullion.com/column/tokushu/81111museum.html>

古代のスリランカを舞台にしたおとぎ話『セレンディップの三人の王子』から、18世紀の英国人作家ホレス・ウォルポールは、「偶然と才気によって思いがけない発見をすること」をあらわす「セレンディピティ (serendipity)」という言葉を生み出した。今では本来の語義にとどまらず、スリランカの豊かさや素晴らしさそのものをイメージさせる言葉としても用いられている。スリランカの魅力を堪能できる展覧会である。著者が「特別展：スリランカ」を訪問したのは、2008年9月26日である。

展覧会は、第1章「アヌラダプラ時代(紀元前3世紀～後11世紀)」、第2章「ポロンナルワ時代から諸王国時代(11～16世紀)」、及び第3章「キャンディ時代とそれ以後(16～20世紀)」と大きく3つに分かれている。

4.2.2 特別展：スリランカの音声ガイド

特別展「スリランカ：輝く島の美に出会う」の音声ガイドでは、2000年以上にわたる仏教美術をはじめ、スリランカの魅力あふれる歴史と文化を、神話やエピソードを交えながら、わかりやすく解説している。音声ガイドのナレーターには、スリランカ出身のアントン・ウィッキー氏(1940年9月26日-)を起用している(写真6参照)。ウィッキー氏は、スリランカ生まれで、国立セイロン大学卒業後、日本の文部省の国費留学生として来日する。1979年



写真6 アントン・ウィッキー氏(ナレーター)

出典：<http://www.serendipity2008.jp/2008/09/post-7c53.html>

より1993年まで日本テレビ「ズームイン!!朝!」で「ワンポイント英会話」のコーナーを担当し、全国的な人気を集める。現在はカルチャー・スクールなどで英会話を教えるとともに、全国各地で講演活動を行う。主な著書に「外国人から見た日本文化」「ウィッキーさんの

1日1分!英会話」などがある。

金色の観音菩薩像など146点の仏像や宝飾品を、その美しさとスリランカの文化や歴史とともに、プロのナレーターとウィッキー氏が、交互に解説してくれる。ガイドのある展示品は23作品で、鑑賞者の歩調を考えて配置されている。すなわち、鑑賞者の歩調とナレーターの解説が、ちょうどよく適合するように作られている。男女が背中合わせになった像を正面の男性側から鑑賞者が見ていると、「反対側に回ってみてください。」とナレーターの声が促す。その通りに歩を進めると「どうです?」という声とともに、女性像が鑑賞者の目に飛び込んでくる。まるで一緒に展示を見て回っているような感覚を覚える。

展覧会会期中、本展宣伝部長も務めるウィッキー氏がスリランカの魅力について話をするトークショーも4回開催された。ウィッキー氏の起用は、主催者側の一致した願いで、スリランカ出身のウィッキー氏の人柄の表れた、親しみやすいガイドとなった。

音声ガイドの制作を担当したのは、読売新聞社と「アートアンドパート」である。「アートアンドパート」では、これまでにもさまざまな試みを行っている⁹⁾。展覧会の内容とナレーターの個性がマッチすると、質の高いプログラムとなる。特別展「スリランカ：輝く島の美に出会う」では、スリランカ出身で、テレビ等で全国的に知名度があるウィッキー氏の解説が、なじみやすい個性あふれる質の高いプログラムとなっていたと思う。この場合の質の高さとは、解説の内容の質というより、親しみやすく展示を鑑賞できる、そしてスリランカの魅力を倍増して伝える力がナレーターにあったということである。

音声ガイドの所要時間は約30分で、解説作品数は23点である。音声ガイドの機器(写真7参照)は会場入口にて借りることができ、事前の予約は必要ない。使用料は500円である。音声ガイドの監修は、東京国立博物館である。



写真7 特別展スリランカの音声ガイド

出典：<http://www.serendipity2008.jp/2008/09/post-5fd8.html>

4.3 ポストン美術館：浮世絵名品展（江戸東京博物館）の音声ガイド

4.3.1 ポストン美術館：浮世絵名品展の概要

「ポストン美術館：浮世絵名品展」は、2008年1月から全国を巡回し、その展覧会の最後の東京展として2008年10月7日から11月30日まで、江戸東京博物館1階企画展示室で開催された。

ポストン美術館には5万点にのぼる浮世絵版画と、多くの版本・肉筆画が収蔵されている。その質の高さと数量は、世界一の規模と評価されてきたが、近年までほとんど公開されることがなかった。この膨大なコレクションの中から第一級の浮世絵を厳選した本展出品作品は、版画132点、肉筆5点、下絵画稿類12点、版本10点で構成され、その大多数が日本初公開である。

本展は、初期浮世絵版画的誕生から幕末までの展開を、主要流派と絵師の作品により通覧できる。まさに浮世絵の歴史を体感することのできる構成であ

る。これは、ポストン美術館の各時代を網羅する膨大なコレクションの存在があっはじめて実現できたものである。本来、浮世絵は日本の江戸時代の文化であるが、日本ではなく海外の美術館の浮世絵コレクションを通して江戸文化のダイナミズムを知ることができる。

これまでほとんど公開されてこなかったポストン美術館秘蔵の浮世絵版画群は、いずれも保存状態の良好な作品ばかりである。特に、ポストン美術館内でもこれまで展示されたことがない、磯田湖龍齋の『雛形若菜の初模様』シリーズでは、遊女が身にまとった着物の美しい模様が、いま摺り上がったばかりと思うほどの鮮やかな色彩を留めている。また、二代鳥居清倍の5点の漆絵も発売時の趣きを十分に伝える華麗な作品である。

本展には貴重な版本も出品されている。中でも、日本の劇書の四大珍書とされる、1700年（元禄13）刊行の鳥居清信『風流四方屏風』、また、喜多川歌麿の『画本虫撰（えほんむしえらみ）』をはじめ、傑出した狂歌絵本として名高い『潮干のつと』『蘇詞夷（わかえびす）』も注目である。さらに、幻のコレクションといわれるスポルディング・コレクションからは、菱川師宣『美人絵つくし』、勝村春章『三十六歌仙』、北尾政演（山東京伝）『吉原傾城新美人合自筆鏡』という質の高い3点の絵本が出品されている。

ポストン美術館は、日本以外では質量ともに世界一と言われる日本美術コレクションを持つ。長年にわたり優れた作品を収集してきた。ポストン美術館のコレクションのなかでも浮世絵はとりわけ有名で、江戸初期から幕末・明治まで五万点もの版画が所蔵されている。その中から優れた作品を精選した本展には、ウィリアム・スタージス・ビゲローのコレクションも数多く含まれている。また、世界的に知られる作品とともに、最近調査が行われ今回日本で初公開となる作品も多数出品されている¹⁰⁾。

著者は、1982年から1984年の2年間ポストンに留学し、その間何度もポストン美術館を訪れる機会をもった。そのコレクションの豊富さと、質の高さ

は実際に目の前で確認している。当時、浮世絵も展示されていた。その時は、このような貴重な作品があることを知らずに浮世絵を眺めていた。

著者が今回この展覧会を訪問したのは、2008年10月10日である。

4.3.2 ポストン美術館：浮世絵名品展の音声ガイド

日本初公開を多く含む137点が一挙に里帰りした「ポストン美術館：浮世絵名品展」の音声ガイドのナレーターを務めるのは、俳優の里見浩太郎氏(1936年11月28日-)である(写真8参照)。越後屋を描いた作品では、「お、繁盛してますね!」と、洪い声と時代劇俳優ならではの語り口が、聴く者を江戸の世界へと誘う。

音声ガイドの収録を終えた後に里見氏は、「時代劇には有名な北斎や歌麿など、浮世絵師の名前がよく出てくる。そういう絵師が、実際にどういう絵を描いていたかが分かって、面白かった。やはり本物の浮世絵を見てみたい。」と述べている。

音声ガイドのナレーターという仕事は、役者からすると、あまり得意ではないということである。つまり感情移入しない語りは、あまり経験がないとの

ことである。時代劇で耳なじみのある絵師の事など、色々勉強になったと述べている。特に印象に残った作品は、北斎と溪斎英泉ということである。肉筆画の溪斎英泉の絵について、浮世絵に出てくる女性たちのポーズは、オーバーであるが、肩から腰の線が実に魅力的である。着物を着ているときの、「体の動きの流れ」は、なかなか今の女優には出せない立ち居振る舞いの色気がある。昔は箏に三味線など勉強するのが当たり前で、それが自然ににじみ出たものだが、今は違う。本当に浮世絵の女性たちは、表情がみな同じような人形のような顔でも、どれも色があって、艶っぽいと述べている。時代劇俳優ならではの感想である。

浮世絵に描かれた世界がいきいきと浮かび上がってくる、魅力たっぷりのナレーションである。随所にセリフ調のナレーションをちりばめた音声ガイドは、江戸の情緒たっぷりである。

この展覧会の音声ガイドの特徴は、まさにナレーターの選出にある。浮世絵の描かれた江戸時代の人物は、当然もう存在しない。そこで、時代劇俳優の声を用いたのである。しかし、里美氏は音声ガイドのナレーションを吹き込むにあたり、自分を江戸時代に生きて、広重、歌麿、北斎もみな友達である一人の絵画や歌舞伎好きの労働者になりきったつもりで語った、と述べている¹¹⁾。

音声ガイドの制作を担当したのは、「よみがえる黄金文明展」と同じく「株式会社A&D オーディオガイド」である。制作担当者は、ナレーターは著名人であれば誰でもいいということではなく、声の良さと美術への理解が必要だと述べている¹²⁾。声の良さに加えて、その展覧会にふさわしい声の持ち主ということであろう。時代劇俳優さながらの、時代劇調の語り口が、鑑賞者をなじみのない江戸時代へと誘ったのである。

音声ガイドは、作品から目を離すことなく解説が頭に入る。展示の主役はあくまでも作品とし、その作品をより深く理解する手助けとなるのが音声ガイドである。

音声ガイドの所要時間は30分である。会場入口



写真8 里美浩太郎氏(ナレーター)

出典：<http://ukiyoeten.jp/topics/071220.html>

にて借りることができ、事前の予約は必要ない。使用料は500円である。音声ガイドの監修者は「A&D オーディオガイド」の永田生慈氏である。

4.4 フェルメール展（東京都美術館）の音声ガイド

4.4.1 フェルメール展の概要

「フェルメール展：光の天才画家とデルフトの巨匠たち」は東京都美術館で2008年8月2日（土）から12月14日（日）まで行われた。フェルメールが発する光は、観る人の眼から入り胸の奥の幸福の扉を照らすと言われる。ヨハネス・フェルメールは西洋美術史上、最も才能溢れる画家であり、三十数点しか現存しない作品により謎のベールに包まれている。350年以上の時を経て、いま世界中で最も熱く高い脚光を浴びている。独特な光の質感と知性的なタッチで人を魅了する絵画の中で、とくに評価の高い作品群がこの展覧会に集まった。同時にフェルメールが生涯を過ごしたオランダの小都市が育んだ美の潮流デルフト・スタイルの画家たち、カレル・ファブリティウス、ピーテル・デ・ホーホ等の名作も展示される。日本初公開の作品も含め、これほどの傑作が日本で一堂に会したことはない。

ヨハネス・フェルメールは、17世紀に活躍したオランダ画家の中でも最も評価の高い画家の一人である。1632年に絵画の売買を趣味とする絹織物職人の息子として生まれ、自らも絵画の売買に熱心で、その生涯の全てをデルフトで過ごす。現在フェルメールが描いたと判明している作品は、わずか36点しかない。宗教画が多い初期の作品には、ユトレヒトのカラヴァッジョ派の影響を見ることができる。しかしこれ以降の彼は、1人か2人（それも通常は、女性）の登場人物によって構成される繊細な室内画を制作する。親しげな様子を描いたこれらの作品に登場する人物は、手紙を読んだり、首回りの襟を正したり、牛乳を注いだりなど、日常生活の作業に熱心に没頭している。またフェルメールの作品では、光が窓から差し込んでくる様子が多く描かれている。彼は光が物にあたっていく様子を描く達

人であったという¹³⁾。

著者が今回この展覧会を訪問したのは、2008年12月23日である。

4.4.2 フェルメール展の音声ガイド

「フェルメール展：光の天才画家とデルフトの巨匠たち」の音声ガイドでは、朝岡聡氏（1959年10月29日-）がガイドナレーターを務めている。朝岡聡氏は「オフィス・トゥー・ワン」所属のフリーアナウンサーで、落ち着いた鮮明な声を聞かせている。古楽とオペラではユニークな評論が注目されており、クラシックの語り部としても幅広く活躍している。雑誌「音楽の友」等でオペラの連載を行うほか、演奏歴30年のリコーダーではトーク付演奏会を開くなど音楽愛好家以上の才能を発揮している。

フェルメール展の音声ガイドでは、i-タッチ・ガイドシートといシステムが採用されている¹⁴⁾。「(株)GLD Japan」による新しいガイドシステムである。これまでの音声ガイドは、機器を首に掛けたり、電話の受話器のような機器を持ち、番号を入力するというものが主流である。このi-タッチ・ガイドシートは、用意された音声ガイドのある絵画がカラー印刷されたガイドシートにi-タッチペンのペン先で触れるだけでガイドが開始され、ヘッドホンから解説が流れるというものである。(写真9参照) i-タッチペンとは、手のひらサイズでペン型の音声再生専用ツールである。通常印刷の上に視覚では識別のしづらい特殊印刷を施し、簡単にi-タッチペンで触れるだけで音声による情報提供を可能とするものである。(写真10参照) 音声ガイドの解説の内容は、展示にある文字によるキャプションとほとんど同じであった。音声ガイドの解説には、特別力を入れているとは思えない。

この「フェルメール展」では、音声ガイドに解説とは別の工夫が凝らされている。音声ガイドで単に作品解説を行うだけでなく、さまざまな趣向を盛り込んで付加価値をつけるのは最近の展覧会では珍しいことではない。「フェルメール展」の音声ガイドでは、展示作品ごとに選曲されたフェルメールと同時代のバロック楽曲と、作品をイメージして東京藝



写真9 フェルメール展 i-タッチ・ガイドシート



写真10 i-タッチペン

出典：http://www.gld-japan.com/

術大学大学院音楽音響創造研究の院生と同大学音楽学部音楽環境創造科の学生たちが作曲したオリジナル楽曲が、BGMとして使用されている。オリジナル楽曲は、すべてこの展覧会のために作曲されたものだという。ガイドシートの♪(音符)マークをタッチすると、東京藝術大学の院生や学生の作曲した楽

曲が流れる¹⁵⁾。

音声ガイドを借りたときに渡されるガイドシートには、フェルメール展テーマ曲「奇跡の光」以外の曲名が書かれていないので、絵画作品名と作曲者を対照した表を作成した(表2参照)。

「手紙を書く婦人と召使い」には、実際の展覧会では音楽がなかった。これは、この作品の出品が決定したのが展覧会開始直前で作曲が間に合わなかったものと思われる。この作品には特別出展作品と注記が付けられていた。一方、「絵画芸術」は当初出品が予定されていたが、突然出品不可となった作品である。当然ながら、音声ガイドも音楽もなかった。音声ガイドでは解説にあわせて楽曲が流れるが、途中まで演奏され解説が終わると共に途中で音楽も途切れてしまう。

ここで、音声ガイドのBGMである「オリジナル楽曲」の演奏は、第2章の6つの音活用レベルの「レベル4：展示のための音による環境づくり」に相当することが確認できる。これまで音声ガイドは6つの音活用レベルの「レベル3.2：音声解説」の位置づけを持っていた。この展覧会でも、4.1の「よみがえる黄金文明展(大丸ミュージアム)の音声ガイド」で述べたように、音声ガイドは、「レベル3.2：音声解説」の役割のみでなく、その他の役割も同時に行うことが可能であることが確認された。この展覧会の「オリジナル楽曲」の演奏は、単なるBGMではない。展示を鑑賞するための重要な環境づくり

表2：フェルメール展の音声ガイドの作品とオリジナル音楽

展示作品(またはタイトル)	オリジナル楽曲の作曲者	バロック楽曲	注記
フェルメール展テーマ曲「奇跡の光」	余田 有希子		
マルタとマリアの家のキリスト	飯田 能里子		
ディアナとニンフたち	余田 有希子		
小路	キム・ニコル		
ワイングラスを持つ娘	余田 有希子		
リュートを調弦する女	村上 史郎		
絵画芸術			出品不可
ヴァージナルの前に座る若い女	石田 多朗	涙のパヴァーヌ	
手紙を書く婦人と召使い	(キム・ニコル)	サラバンド	特別出展作品

を担っている。

TBSのクラシック専門インターネットラジオOTTAVAの特設サイト「OTTAVA meets Vermeer」では、本展覧会に出品されたフェルメール作品のために制作されたオリジナル楽曲や、作品ごとに選曲された同時代のバロック楽曲を聴きながら、作品の画像を見ることができる¹⁶⁾。

展覧会オリジナルテーマ曲「奇跡の光」も全8バージョンを無料で聴くことができる。フェルメールの時代は、絵画と同様音楽もルネサンスからバロックへと大きく様式が変化した時代である。教会、貴族階級から、市民の生活に楽器や音楽が徐々に浸透した。当時の人々の豊かな気持ちや、穏やかな光に包まれたデルフトの巨匠達の絵画から感じられる。この歴史的な展覧会にふさわしいテーマ音楽「奇跡の光」を、東京藝術大学大学院音楽音響創造研究博士課程の余田有希子（よでん ゆきこ）氏が作曲した。弦楽合奏がオリジナルであるが、ピアノソロ、フルートとハーブの二重奏、さらに古楽器やパイプオルガンによる6種類の楽器バージョンがある。

現在、この特設サイトでは、テーマ音楽「奇跡の光」の他に7作品が掲載されている。その中には展覧会直前に出品が決定し、オリジナル楽曲が間に合わなかった「手紙を書く婦人と召使い」も掲載され、オリジナル楽曲とバロック楽曲を聴くことができる（表2参照）。

4.5 その他の博物館の音声ガイド

その他の博物館の音声ガイドの例として、展示してある作品を創作した作家本人の声が聞けるものがある。「横浜トリエンナーレ2008」と「没後40年：レオナルド・フジタ展」（上野の森美術館）の例がそうである。

「横浜トリエンナーレ2008」は、2008年9月13日から11月30日まで開催された。2001年に始まった現代美術の国際展「横浜トリエンナーレ」の第3回展である。総合ディレクターの掲げるテーマに基づき、世界25カ国・地域より72名の作家を選定し、

多様な作品（映像、インスタレーション、写真、絵画、彫刻等）を展示する。世界最先端の現代美術の紹介に努め、新作を中心に展覧する一方、開催地・開催場所の魅力や個性を生かした作品（サイトスペシフィック・ワーク）も数多く含めることによって、街を取り込んだ大規模な「現代アートの祭典」となっている。会期中は、トリエンナーレのコンセプトや理念を補完するシンポジウムをはじめ、作家と参加者との対話が広がるようなワークショップやギャラリー・トークなどの交流イベントも積極的に展開される¹⁷⁾。

会場となったのは、メイン会場が新港ピア、日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）、赤レンガ倉庫1号館の3か所、その他の施設・会場として、山溪園、大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザ、運河パークの4か所、計7か所である。音声ガイドは、作家自らが作品について語ったインタビューを含むもので、新港ピア、日本郵船海岸通倉庫の2つの会場に展示された26作品の解説をするものである。総合ディレクター水沢勉氏（神奈川県立近代美術館企画課長）による概要説明も含まれている。音声ガイドの所要時間は30分である。会場入口にて借りることができ、事前の予約は必要ない。使用料は500円である¹⁸⁾。

「横浜トリエンナーレ」のような現代美術の場合は、音声ガイドがあったほうが良いと思う。なぜならば、古典芸術に比べて、作者のメッセージが難解なものが多く、作家自身のガイドで初めて、「そういうことなのか!」と理解できたものも多い。ガイドがなければ、わけがわからず終わったかも知れない作品に、あらためて感動できるものである。

「没後40年：レオナルド・フジタ展」（上野の森美術館）は、2008年11月15日から2009年1月18日まで開催された。本展は2008年7月12日の札幌をスタートとして、2009年6月まで全国5会場を巡回する（写真11参照）。

1992年、フランス・オルリー空港近くの倉庫で発見された、縦横3メートルの大作4点。それらは一部が1929年に日本で公開されたものの、その後



写真11 藤田嗣治

出典：<http://www.asahi-mullion.com/column/tokushu/81111museum.html#top>

所在が不明になっていた、藤田嗣治(1886-1968)の「幻の作品」である。この4点はアトリエの建物とともにエソンヌ県の所蔵となり、フランス第一級の修復チームによる本格的な修復作業が、6年の歳月を経て終了した。そして2008年夏、これらすべての大作が日本で一堂に会し、いよいよ初公開となった。また、今回は、この4点のほかにも、パリ日本館壁画と関連する貴重な大作1点が、世界初公開作品として加わった。

日本人でありながらも、フランス人レオナルド・フジタとしてその生涯を終えた数奇な異邦人、藤田嗣治。本展では、独自のスタイルを確立し、大画面の構成に挑んだエソンヌの大作群を中心に、「すばらしき乳白色」と世界が絶賛した裸婦群を展示する。また、アトリエ・フジタに残された豊富な生活資料や作品も日本で初公開される。さらに、キリスト教改宗後、「レオナルド・フジタ」として生涯を賭けて挑んだ、ランスの「平和の聖母礼拝堂」とそのフレスコ壁画の習作群も世界初公開される。幻の群像大作への挑戦とエソンヌをめぐる生活、そして晩年の宗教画への昇華をみることができる。本展は、日本の5会場の出品総数、油彩約50点、水彩・ドローイング約100点、アトリエ関連作品約100点において、この類いまれなる世紀の天才画家の実像を明らかにし、いまだかつてない圧倒的なスケールで、藤田嗣治の実像に迫るものである¹⁹⁾。

アトリエの一部が再現された中で80歳を前にしたフジタの声と小唄が流れる。音声ガイドには、フジタの歌声も収録されている(写真12参照)。突然日本の小唄を歌いだす。この展示の目玉は、1992

年に発見された幻の群像大作4点(『ライオンがいる構図』『犬がいる構図』『争闘Ⅰ』『争闘Ⅱ』)の日本初公開である。1点が畳2枚くらいの大きさである。実際、絵の前に立つと、これはミケランジェロの描く「裸」に似ていると思った。音声ガイドでも、藤田がヴァチカンを訪れた際にミケランジェロの『最後の審判』を見て、その作風に影響を受けたのではないかと解説されている。藤田独特な「乳白色の肌」と繊細な線は、エネルギー溢れる肉体系現の中でも生かされている。



写真12:「没後40年:レオナルド・フジタ展」の音声ガイド

ただ、アトリエの展示の仕方に多少問題があったように思う。人の流れを計算してない展示の仕方であった。鑑賞者の動線がU字型に流れればよいのだが、最初に戻って見直さなければならない展示の並びであった。また文字によるキャプションが長く、多いことも気になった。さらに、音声ガイドを聴いている人が多いので、人の流れが進まないことがあった。音声ガイドを使用するのであれば、文字によるキャプションをもう少し簡略化することも可能であるように思う。また、解説No.5の《自画像》で、音声ガイドの中で「油彩」と言っているのは「水彩」の誤りで、文字によるキャプションの方が正しいということである。

音声ガイドの操作方法はとても簡単で、作品の横にある音声ガイドの番号にあわせてボタンを押し、

耳にスピーカーをかざすだけである。音声ガイドの所要時間は35分で、解説点数は30点である。図録や解説パネルには掲載のない内容を含んでいる。会場入口にて借りることができ、事前の予約は必要ない。使用料は500円である（写真13参照）。



写真13：「没後40年：レオナルド・フジタ展」の音声ガイド

5 音声ガイドの評価

ここでは、第4章の4.1から4.4で紹介した、4つの展示の音声ガイドを評価する。4つの展示における音声ガイドの特徴を表3に示す。

「よみがえる黄金文明展」と「フェルメール展」は音声ガイドの本来もつ機能に加えて、新たな機能

を付加した点が注目になる。「よみがえる黄金文明展」は、操作のし易さ、ナレーターの声の質、音声ガイドの解説の質の高さも非常に優れている。さらに、BGMとしてガドゥルカの演奏によるブルガリアの舞曲や民俗音楽を聴くことができる。これは単なるBGMではない。第2章に示した音活用の6つのレベルに当てはめると、BGMは

レベル5：展示内容と関連性の低い音の提供

レベル5.1：BGM

レベル5.2：アナウンス等信号音

のレベル5.1：BGMに分類される。これは展示内容と関連性の低い音の提供である。ところが「よみがえる黄金文明展」の音声ガイドに流れる音楽は、ブルガリアのトラキア文明を彷彿とさせる音楽であり、展示の雰囲気や聴覚からも盛り上げるものである。したがって

レベル4：展示のための音による環境づくり

展示の雰囲気を盛り上げるために音がデザインされる。音がなくても展示は完成、音はあくまで補助的手段である。

で示すように、レベル4の役割を果たしている。

「フェルメール展」の音声ガイドに流れる音楽も

表3：4つの展示の音声ガイドの比較

展示会	解説の質	ナレーター	機器	操作性	特徴	料金	所要時間	ガイド点数
よみがえる黄金文明展	高い キャプションを超える内容	安井邦彦 声優 (男性)	従来品	簡単	BGM 音楽による 環境づくり	500円	30分	26点
特別展： スリランカ	普通 なじみやすい解説	アントン・ウィッキ スリランカ人 (男性)	従来品	簡単	ナレーターの 個性	500円	30分	23点
ボストン美術館： 浮世絵作品展	普通 なじみやすい解説	里見浩太郎 時代劇俳優 (男性)	従来品	簡単	ナレーターの 個性	500円	30分	
フェルメール展	普通 キャプションと同じ内容	朝岡聡 フリーアナウンサー (男性)	i- タッチ ガイド	簡単	BGM 音楽による 環境づくり			12点 (うち音楽 9点)

同様の役割を果たしている。フェルメールが活躍していた時代のバロック音楽が流れ、さらにフェルメールの作品のイメージから作曲されたオリジナル曲が流れる。これもまさに「レベル4：展示のための音による環境づくり」を担っている。

「フェルメール展」では音声ガイドの操作のし易さで、他の音声ガイドにはない新しいシステムを導入している。i-タッチ・ガイドシートというシステムである。ナレーターの声の質も高く評価できる。しかし、音声ガイドの解説の内容は、文字によるキャプションとほとんど変わりなく、わざわざ音声ガイドで解説をする必要があったかどうかは疑問である。

「特別展：スリランカ」と「ボストン美術館：浮世絵名品展」は、音声ガイドのナレーターの選出に工夫をこらしたものである。「特別展：スリランカ」では、スリランカ人のウィッキー氏を起用している。スリランカという国を紹介する展示であるので、まさに適任である。もう一人のナレーターと会話をしながら解説をしていくという方法を採用している。

「ボストン美術館：浮世絵名品展」では、時代劇俳優を起用している。展示が江戸時代を代表する浮世絵という芸術作品であるので、江戸時代の時代劇を多くこなした経験のある時代劇俳優は適任である。ナレーター自身が、展示に大きな関心を持っているということも望ましいことである。江戸時代調のせりふを入れるなど工夫をこらした解説である。

6 音声ガイドの展開と可能性

最近では、Pod casting (ポッドキャスト) による博物館・美術館の展示作品音声ガイド Pod museum も制作されている。これまでの音声ガイドは、博物館や美術館を訪れると音声ガイドのセットが有料で借りられるというものであった。博物館や美術館を訪れる前にポッドキャストで展示作品情報入手し、鑑賞できるようになれば利便性は高い。日本では最近、東京都現代美術館が、展覧会の音声

ガイドを iPod などの携帯音楽プレーヤー用に無料配信するサービスを始めた。海外ではすでに、いくつかの美術館が同様のサービスを実施している。利用者は「ポッドキャスト」と呼ばれるシステムで、博物館ホームページからプレーヤーに音声ガイドを取り込み、展覧会場で聴くことができる。

米国では、携帯音楽プレーヤー、iPod 対応の音声ガイドを提供する美術館が増えている。訪問する前にウェブサイトでダウンロードしてもらい、鑑賞中に再生して、美術品に関する解説を聴いてもらうシステムである。

ミネアポリスのウォーカー・アート・センターでは1年前に導入した。iPod を持っていない人には、貸し出しも始めている。また、自分のパソコンで事前にダウンロードするのが面倒な人には、その場でダウンロードできるというシステムを今後導入する方針だという。

美術館の音声ガイドは従来、有料の専用機を貸し出すのが一般的だった。だが、iPod を使えば、訪問者は専用機の料金を支払う必要がなく、美術館側も専用機のメンテナンス、充電の手間が省け、コストを削減できる。

ウォーカー・アート・センターでは、携帯電話による作品説明も実施しており人気がある。作品の横に示された番号にかけると、作者本人による説明が聴ける仕組みになっている。

同センターのほか、6年に及ぶ修復を終えたワシントンのスミソニアン・アメリカ美術館では映像を含む iPod 用の館内ガイドを用意している。インディアナポリス美術館やカリフォルニア州オレンジカウンティ美術館でも、ダウンロード用の音声ガイドを提供している。

日本でも、同様のシステムが開発されている。携帯電話音声ガイド「ITSUMOt(イツモ)」が2008年6月2日より、すべてのコンテンツを無料で提供することになった。携帯電話音声ガイド「ITSUMOt(イツモ)」とは、東京都現代美術館でスタートした、au、NTT DoCoMo、SoftBank の携帯電話で利用できる音声ガイドである。展覧会情報などのインフォ

メーションを見ることができるほか、音声データのダウンロードが可能な機種なら、いつでもどこでも、展覧会音声ガイドを利用することができる。

東京都現代美術館では、前もってダウンロードした音声データを、展示会場で音声ガイドとして聴くことができる。当然のことながら、作品の前でも利用できる。その際は、他の鑑賞者の迷惑にならないよう、手持ちのイヤフォンを利用することになる。もしイヤフォンを忘れた場合には、展示会場で貸し出しを行なっている。

音声ガイドの利用方法は、① ITSUMOt のサイト「<http://mot.art-inn.jp>」に携帯電話からアクセスする。②音声ガイドをダウンロードする。ダウンロード後はいつでもどこでも音声ガイドを利用することができる。ダウンロード料金は無料であるが、別途パケット通信料がかかるので、パケットフリーの契約をするとお経済的である。

7 おわりに

博物館における音声ガイドは、現在多くの展示に採用されている。最近では、音声ガイドの機器やシステムが積極的に開発され、今までにない効果をもたらすことができるようになってきた。

博物館における音の積極的活用の度合いから、連続する6つのレベルを設定した。音声ガイドは、この6つのレベルのうち、「レベル3：展示物と音を組み合わせた展示」の中の「3.2：音声解説」に分類できる。今回の訪問調査を通して、音声ガイドは「レベル3.2：音声解説」に加えて「レベル4：展示のための音による環境づくり」の役割を果たすことがわかった。さらに、音声ガイドは博物館のサウンドスケープ・デザインにおいて、多くの可能性をもつことが明らかになった。

本稿において、博物館のサウンドスケープ・デザインにおける音声ガイドの位置づけを確認することができた。そして、実際の展示に採用された音声ガイドの実例に基づいて、博物館のサウンドスケープ・デザインにおける音声ガイドのさらなる可能性

を追究した。

わが国では、博物館の中でも美術館の鑑賞は解説に頼らず、先入観なしに見ることがいい、という考えがかつて根強くあった²⁰⁾。しかし、美術史や展示作品の背景などの知識があった方が、作品をより楽しめることも確かである。

博物館の中でも美術館は入場者を増やそうと「分かる」展覧会を目指し始めている。黙って展示と向き合う展覧会から、音と映像で理解を深める展覧会へと変わりつつある。音声ガイドの内容は、まだ玉石混合であるかもしれないが、美術館も確かに変わろうと試みている。

博物館のサウンドスケープ・デザイン（音の展示と音による環境づくり）については、博物館ではあまり議論の対象になっていない。博物館においてはその基本理念や目的に展示があり、音の展示もその中に含まれる。また、博物館の音による環境づくりを考えることも重要である。今後は、博物館で積極的に採用されている「音声ガイド」の観点からも、音の活用を積極的に考えていきたい。

注

- 1) 加藤修子：博物館における音の展示と音による環境づくり：文化情報施設のサウンドスケープ・デザインの展開、『文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要』9 (1), p.4, 2002.
- 2) 加藤修子：博物館における「音の展示」と「音による環境づくり」：全体報告と館種別比較分析およびレベル別分析、『文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要』10 (1), p.29-54, 2003.
- 3) 前掲 1) p.4-6.
- 4) 岩宮眞一郎『音楽と映像のマルチモーダルコミュニケーション』福岡市、九州大学出版会、2000、171p.
- 5) Crampton, R. J. A Concise History of Bulgaria. Cambridge University Press, England, c1997. クランプトン、R. J. 『ブルガリアの歴史』高田有現、久原寛子訳、東京、創土社、2004、340p.

- 6) 禿仁志:ブルガリア調査の15年—考古学教室開室20年によせて、『東海大学紀要文学部』73, p. 107-128, 2000.
- 7) 前掲 5) p. 107-108.
- 8) 藤盛美郎, 禿仁志, 千本真生監修『よみがえる黄金文明～ブルガリアに眠る古代トラキアの秘宝～図録』東京, 東映株式会社, c 2008-2009. p. 124.
- 9) 音声ガイド企画制作 ART&PART. URL: <http://www.artandpart.co.jp/> (参照 2009-7-11)
- 10) ボストン美術館浮世絵名品展. URL: <http://ukiyoeten.jp/> (参照 2009-7-11)
- 11) ボストン美術館浮世絵名品点:美術展ニュース. URL: <http://ukiyoeten.jp/topics/071220.html> (参照 2009-7-11)
- 12) 音声ガイド制作 A&D オーディオガイド. URL: <http://www.adaudioguide.com/> (参照 2009-7-11)
- 13) TBS フェルメール展. URL: <http://blog.ottava.jp/vermeer/jpn/index-j.html> (参照 2009-7-11)
- 14) i-touch Pen. URL: http://www.gld-japan.com/itouch_pen.html (参照 2009-7-11)
- 15) フェルメール展東京都美術館での音声ガイド. URL: http://take-it-ez.at.webry.info/200808/article_15.html (参照 2009-7-11)
- 16) OTTAVAmeeets Vermeer. URL: <http://blog.ottava.jp/vermeer/> (参照 2009-7-11)

- 17) 横浜トリエンナーレ 2008. URL: YOKOHAMA 2008: International Triennale of Contemporary Art (参照 2009-7-11)
- 18) 音声ガイドのすすめ 横浜トリエンナーレ 2008. URL: <http://ameblo.jp/yukko-i4r/entry-10170945595.html> (参照 2009-7-11)
- 19) レオナルド・フジタ展スペシャルサイト. URL: <http://yokohamatriennale.jp/2008/images/yt2008report.pdf?20090512> (参照 2009-7-11)
- 20) 西田健作:展覧会音声ガイドに工夫. 朝日新聞, 朝刊, 2004-6-24, 32面.

参考文献

- 禿仁志:ブルガリア調査の15年—考古学教室開室20年によせて、『東海大学紀要文学部』73, p. 107-128, 2000.
- 藤盛美郎, 禿仁志, 千本真生監修『よみがえる黄金文明～ブルガリアに眠る古代トラキアの秘宝～図録』東京, 東映株式会社, c 2008-2009. 191p.
- 『横浜トリエンナーレ 2008 報告書』URL: <http://yokohamatriennale.jp/2008/images/yt2008report.pdf?20090512> 2009.

Consideration of “Voice Guide” in Soundscape Design of Museums

by KATO Shuko

[Abstract] The voice guide in the museum is adopted for a lot of exhibitions now. The author set up the 6 levels according to a degree of the use for sound at both fields of “exhibition of sound” and “the production of desirable environment by sound” in museums. The voice guide can be classified into “Level 3.2 voice explanation” among these six levels. It has been understood that the voice guide plays the role of “Level 4: the creating environment by the sound for the exhibition” in addition to “Level 3.2: the voice explanation” through this visit investigation. Moreover, the voice guide has understood the narrator’s election is also important. In addition, the voice guide is thought to have dozen possibilities in the soundscape design of mu-

seums.

In this thesis, the location of the voice guide is confirmed, and it inquires into a further possibility of the voice guide based on the example of the voice guide actually adopted.

[Key Words] museums, exhibition of sound, the production of environment by sound, soundscape design, voice guide